

## ホノホシの竜

朝日小学校 四年 濱田 鈴

「ウオーツ、夏休みだー。」  
タツタツタツタツタ・ドッポーン……。

一学期の終業式の帰り道、竜希が真っ先に向かったのは、家ではなくて家の前の浜。通知ひょうを母ちゃんに見せることも、せい服を着ていることも忘れ、浜辺にかばんを投げすてたまま、海に飛びこんだ。

「フオー、最高ー夏はやっぱり海だぜえ。」  
竜希の住む奄美の海は、水平線の先うちよまで青く青くすき通っている。太陽はきらきらとかがやき、海を宝石のように照らしている。

竜希はおさないころからこの海が入す  
だった。夏になると、頭の中は海でいっぱい。

「よーし、泳ぐぞー。」  
思いつきり息をすいこむと、深いところまでもぐっていった。オレンジ色の岩の間にゆらゆらゆれるイソギンチャク。クマノミの親子がかくれんぼをしている。あっ、ウニだ。父ちゃんのおつまみにしてやるつ。そう思って手をのばしたとき、すなの中いきらつと光るものを見つけた。

「なんだ、これ。」

すなの中から取り出した物は形のとのつた、丸い丸い石だった。さっきのように強い光は出していないが、その石はともてぶしぎな色をしていた。

「ぶしぎな石だなあ。もしかしたらすごく高い宝石かもしれないぞ。」

竜希は、その石を大事にポケットに入れて持ち帰った。

その晩のこと、竜希はにかつと笑いながら父ちゃんと母ちゃんにその石を見せびらかした。

「この石、すごいだろう。こんなぶしぎな色の石なんて見たことないよ。もしかして、とっても高い宝石かもしれないぞ。」

「竜希、あんたちよつと目がおかしいんじゃないの。これはただの石だよ。」

「ホノホシ海岸に行けば、たくさん転がっているぞ。」

こんなぶしぎな色の石が、そこらに転がっているなんて聞いたこともない。目がおかしいのは父ちゃんや母ちゃんの方だ。首をかしげながら、何となく母ちゃんの鏡を見てびっくり。そこにうつっているその石は、ぶしぎな色なんてしていなかった。どう見てもただの丸い石。

「うわあー。」

竜希は思わず石をポケットの中につっこむと、晩ごはんもそこそこに自分の部屋にかけこんだ。

その夜、竜希は中々ねつけなかった。どうしてオレにはぶしぎな色に見えるんだ……。

そういえば父ちゃん言ってたな。ホノホシ海岸だっけ……。竜希は真つ暗な天じょうを見ながら、ずつとずつと考えていた。すると

「出して、出して。」

「だ、だれだ。」

竜希はベッドから転げ落ちそうになった。

「……よ、……。ポケットの中。」

小さな小さな声だ。ポケットの中にはあの石が入っている。おそるおそる取り出してみると、その石は強い光をばなっていた。

「な、なんだ。」

竜希は思わずその石を落としてしまった。

そのとき、光の中に人がかがうつった。

「だ、だれなんだ。」

「おどろかせてごめんささい。わたしは森に住むせいれいキリ。あなたにはお願いしたいことがあるの。」

その人がけは美しい女の人の人だった。何だかさびしそうな顔をしている。

「オレにお願いしたいことって何なんだ。」

キリはさびしそうに笑つと、話し始めた。

キリは美しい奄美の森に、たくさんの仲間達といっしょに楽しくくくらししていた。キリ達せいれいは、森の木や動物達が自ぜんの中で安心してくらせるように、神の歌を歌つて森に力を送っていた。けれどもある日、一ぴきの竜がやってきて、キリやキリの仲

間達をさらって行った。せいれい達は丸い石の中に閉じ込められてしまったというのだ。

「竜がこの世にいるっていつのか。」

「人間の目には見えないものがこの世界には数えきれないほどたくさんある。あなたにもきつと分かるわ。」

「そんなことって……。」

竜希は言葉がでなかった。

「ホノホシに行くって竜は言つてた。ホノホシへ行くときゆう、わたしの入った石だけが、この近くの海に落ちてしまったの。」

わたしの仲間達は、きつとホノホシにいるんだわ。」

「それで、オレに何をしてほしいんだ。」

竜希は心ぞうがバクバクしているのを感じた。体中が熱くなっている。

「ホノホシに行くって、せいれいを森に返すように竜をせつとくしてほしいの。自ぜんを守り神といわれた竜があんなひどいことをするなんて。何か理由があるはずよ。わたし達の気持ちを伝えれば、きつと竜だつて分かってくれるわ。」

「へえー。でも何でオレなんだ。竜なんて見たこともないし、話なんてできるわけないよ。」

「わたしは石に閉じ込められてから、たくさんの人にメッセージを送ってみたわ。でも気づいてくれたのはあなただけだった。あなたになら、きつと竜が見えるはずよ。竜と話をしてくれる

と思ったの。」

「オレなんかでいいのかなあ。」

竜希は考えた。キリは仲間を助けたいんだ。オレだったらどうする。オレだったら……。

「分かった。オレやってみるよ。失敗するかもしれないけどがんばってみるよ。」

「ありがとう、竜希。」

キリはほっとしたように笑った。

次の朝早く、竜希は出かけた。リュックの

中に水とうと、自分で作ったおにぎりを入れて。何かの役に立ちそうな気がして、父ちゃんの黒い大きなかさも入れておいた。そして、ホノホシ海岸への地図とキリの石をポケットにつっこんだ。自転車にまたがると、家の前の坂をダーンとすべって行った。

「この山をこえればホノホシ海岸はすぐそこだ。」

竜希は深い山の入り口に自転車を止めた。

「でも、ハブやイノシシが出たらどうしよう。」

竜希がためらっていると、

「大丈夫よ。そのまま進んでちょうだい。わたしは森のせいれい。石に閉じ込められ低手も、森の中では力を出すことができるの。きつとあなたをまもるじつがでね。」

竜希は進んだ。森の中を。ふしぎなことこに

竜希の体は緑色のベールのようなものにつつまれているようだった。けわしい山道を歩

いているのに、つかれすら感じない。まるでちゆうにういているみたいだ。

何時間歩いただろう。目の前が急に明るくなった。そこには海があった。石と石にか

こまれて、そこの海からはかくれがのようになっている。

「ここだ。ついに着いたぞ。ホノホシに。」

カチカチカチカチ……ザァー……

カチカチカチカチ……ザァー……

「何の音だ。」

「あれは、せいれい達の入った石がぶつかり合っている音。でもよく耳をすましてくらんなさい。」

石のぶつかり合う音にまじって、せいれい達

達の声がかすかに聞こえてきた。

「たすけて、たすけて……。」

「あんなにたくさん……。」

竜希はぼつせんとした顔で海岸にある数え

切れないほどの丸い石を見つめた。

「竜希、竜が戻って来たわ。あの岩のかげよ。」

「……。あれが竜……。」

ぎょろりとした目をきらりつかせ、大きな口

からは、するどいきばをむき出している。銀色のうろこは光ががやき、その大きな体をつつんでいた。

竜希は足がすくんで動けなかった。あんな化け物と話なんてできっこないや。弱気になって目が回りそうになったそのとき、温かい光が竜希をつつんだ。

「ゆう気を出して。わたし達をすぐえるのはあなただけ。あなたはわたし達にとってたった一つの希望なの。」

竜希をつつんでいる光は、ホノホシの海岸に集められたたくさんのせいいい達から送られてきたものだった。弱気な心がうそのように消えてしまった。

「よし、行こう。オレにはみんながついている。だからきつと大じょうぶぞ。」

とはいうものの、初めての経験だ。竜と話

すなんてどうやったらいんだよ。竜希はおもわず父ちゃんのかさをさすと、かくれながら竜の前に進んだ。

「なんだ。人間の子どもか。」

竜は、竜希が近づいても動じつともしない。

「やばい、目があった。」

たしかに今、目が合ったのに竜は知らん顔をしてあくびをしている。どういふことだ。竜希は首をかしげた。よし、そっちがその気ならこっちから話しかけてやる。

「おい、その竜。せいいい達をもどしてやれよ。みんな困ってるんだぞ。」

そのしゅん間、竜の顔つきが変わった。ねむそうにしていた目

をかつと見開き、竜希をにらんだ。

「おまえは、オレが見えるのか。」

「見えるから言ってるんだよ。森のせいいい

達にたのまれて、あんたと話をしに来たんだよ。」

「おまえには、せいいい達の声が聞こえるといふのか。」

竜はおどろいた顔で言った。

「森のせいいい達は、歌を歌って木や動物達

を守っていたのに、あんたが石の中に閉じ込めこにつれて来たもんだから、今の森は不安でたまらないんだ。せいいいのいなくなつた森はがけくずれを起こしたり、木がかれてしまつたり、ぜつめつしてしまう動物だっているんだぞ。」

「何を言うか、人間め。おまえ達は何十年も前からいたるところで森をこわしているではないか。この島だつてそうなるに決まつている。オレは自ぜん守り神、竜神だ。おまえ達がこの島をめちゃくちゃにする前に、せいいい達をすくつてやっているだけだ。」

「でも、せいいい達はオレに助けてくれと言っているんだ。あんたにはその声がきこえないのか。」

「本当にそう言っているのか。竜神にはせいいいの声は聞こえない・・・。だが、なぜなんだ。なぜせいいいはそんなことを言う。オレはせいいい達をすくおうとしただけなのに。人間がほろんでしまつて何万年も先の未来まで石の中でねむらせてやるつもりだったのに。」

竜はつらそうにため息をついた。

「あんたって本当はいいやつなんだな。でも、オレ達奄美の人間は、自ぜんをめちやくちやになんてぜつたいにしないよ。せいいい達もそれを分かっているから奄美の森に住んでいたいんだよ。」

「自ぜんを大事にする人間……。おまえ達はそうだっていうのか。」

「おつ。当たり前さ。オレはこの奄美の自ぜんが大すぎなんだ。オレだけじゃない。奄美のみんなだってそうさ。ずっと守って行く」と思っているよ。めちやくちやにしようなんてやつは、ぜつ対にゆるさない。」

「おまえみたいなお人間もいるんだな。この島の自ぜんは、人間の心で守られているのかもしれないな。」

竜は目を細めた。なんだか笑っているようにも見えた。

「この島のせいいい達は幸せなのか……。よし、せいいい達を森に帰してやる。ただし、約束だぞ。この島の自ぜんを守る。ことができなくなったその時は、この島のすべてのせいいい達をつれて行く。もっと遠くでだれも入ることできない場所へだ。」

「分かった。約束するよ。ありがとう、オレなんかの話聞いてくれて。」

竜希はにかつと笑った。

「この世界には、自ぜんが悲鳴をあげているところがたくさんある。オレはそこに行くよ。この島はだいじょうぶだ。こぞうたのんだぞ。」

「こぞうだって。オレ、竜希っていうんだ。竜の希望って書くんだよ。おぼえといてくれよ。」

「竜希。竜の希望……。」

銀のつるこから銀色の光がはなたれた。あたり一面まばゆい光につつまれて、石の中からたくさんのおせいいい達が森に向かって飛んで行くのが見えた。

「ありがとう竜希。これで、森にもどれるわ……。」

「キリ……。」

にっこりと笑ったキリの姿もまた、石の中からふわりと飛び出し、森の中に消えていった。

光がやわらいで、あたりが見えるようになったとき、竜希が立っていたのは、家の前の浜。

「あれ、いつの間にかこんなところに……。」

何げなくポケットの中に手をつっこむと、そこには丸いただの石。

「やっぱ、奄美は最高だな。この自ぜんずっとずっと守っていいかな。」

丸い石に話しかけながら、竜希はにかつと笑った。

すっかりうす暗くなった水平線の上に、大きな夕日がしずかに  
しずかにとけていった。